

## 京都秋期福音特別集会(3)

## 終末的天国人 ——イエスの天国——

## ——マタイ伝第20、23、25章、他——

1967年11月5日

小池辰雄

終末的現在と究極的終末 聖霊の油を持って迎える 突き抜けた魂 自分を投げ捨てて進んで行く 極限的な状況の放蕩息子 聖霊の火を投ぜんために来た 自分を欠けた者と自覚する者 「神—キリスト—我」の直結の世界 砂漠はサフランの如く 究極的な終末を予表している徴 「一デナリ」は永遠の生命の糧 賜りたる信 終末的な天国を待ち望む実存的待望の姿 あるがまま投げ出せ 日日は日曜日 十字架を負うところの力

## 【マタイ20】

1 天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし。 2 一日、一デナリの約束をなして、労働人どもを葡萄園に遣す。 3 また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、 4 「なんじらも葡萄園に往け、相当のものを与えん」といえば、彼らも往く。 5 十二時頃と三時頃とに復いでて前のごとくす。 6 五時頃また出でしに、なお立つ者等のあるを見ていう「何ゆえ終日ここに空しく立つか」 7 かれら言う「たれも我らを雇わぬ故なり」 8 主人いう「なんじらも葡萄園に往け」 9 夕になりて葡萄園の主人その家司に言う「労働人を呼びて、後の者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」 10 斯て五時ごろに雇われしもの来りて、おのおの一デナリを受く。 11 先の者きたりて、多く受くるならんと思いに、之も亦おのおの一デナリを受く。 12 受けしとき、家主にむかい呟きて言う、 13 「この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の労と暑さを忍びたる我らと均しく、之を遇えり」 14 主人こたえて其の一人に言う「友よ、我なんじに不正をなさず、汝は我と一デナリの約束をせしにあらざるや。 15 己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく与うるは、我が意なり。 16 わが物を我が意のままに為るは可からざるや、我よきが故に汝の目あしきか」 17 斯のごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし』

## 【マタイ23】

15 禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得んために海陸を経めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。 16 禍害なるかな、盲目なる手引よ、なんじらは言う……



## 【マタイ25】

1 このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。2 その中の五人は愚にして五人は慧し。3 愚なる者は燈火をとりて油を携えず、4 慧きものは油を器に入れて燈火をともに携えたり。5 新郎、遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼わる声す。7 ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8 愚なる者は慧きものに言う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに往きて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉されたり。11 その後かの他の処女ども来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。13 されば目を覚しおれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。……

31 人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位に坐せん。32 斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33 羊をその右に、山羊をその左におかん。34 爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。35 なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36 裸なりしときに衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり」37 爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。38 何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。39 何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」40 王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり。」

## 【ルカ14】

15 同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』16 之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。17 夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、18 皆ひとしく辞りはじむ。初の者いう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」19 他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を験すために往くなり。請う、許されんことを」20 また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能わず」21 僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言う「とく町の



大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」<sup>22</sup> 僕いう「主よ、仰のごとく為したれど、なお余の席あり」<sup>23</sup> 主人僕に言う「道や籬の辺にゆき、人々を強いて連れきたり、我が家に充たしめよ。<sup>24</sup> われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味得る者なし」』

### 【黙示録7】

12 『アアメン、讚美・栄光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン』<sup>13</sup> 長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』<sup>14</sup> 我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。』<sup>15</sup> この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。<sup>16</sup> 彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すことなし。<sup>17</sup> 御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』

### ●終末的現在と究極的終末

今日は「終末的天国人」という題です。今度は三回とも、とにかく「天国人」という言葉が出てくるわけです。第一回では、「天国人の素質」と題しまして、山上の大告白のところの序論のところを主題にしましてお話しいたしました。そういう現実にある。そういう現実を自分の素質として新しく賜った。

#### 「幸福なるかな」

と言われるのは、キリストが即ち幸いの主体となつてくださつて、「幸福なるかな」というわけであります。

第二回では、「天国人の実存」という題で、やはりこれもそのような賜りたる新しき人となった者は動かざるを得ない。そこでそれが社会的、道徳的な実践の面で展開していくとともにまた、その人を通してその悩み苦しみを具体的に力を与えて助けあげていくという、その精神的な面と、また肉体的な面における力ある存在となつていくという、現在の天国の事態を、その内面とその外面、内なる在り方とまた外なる在り方、というような角度のお話をしたわけであります。

今日は第三回になりまして、神の国、天国というものは神の、言うまでもなく支配するところという意味です。「ところ」というのはなにも空間的な場所ではない。また、いついかなる時も、いかなる所におきましても、神の支配したもうところ。具体的にいうと神の霊がそこに働いているところ。これが即ち天国である。神の国である。「ところ」というも



の時間空間の客体的な対象そのものは我々人間であります。

そういうところから、今日は、その神の国の、今度はその相対的な時間の世界の限界がきて、極限状況がきて、ついに次の次元の世界に入る。即ち、それが終末の天国。黙示録でうたわれているところの、またイザヤ書において第二イザヤ、第三イザヤにおいて展開しているところの、預言者たち―イザヤに限りませんが、ホゼアでも、アモスでも―にもうたわれておりますが、そういう最後の新天地への待望の世界。これが終末的生活を生きる人。それが終末的天国人。終末的現在と究極的終末と、この二つがあるわけです。

「幸福なるかな、天国はその人のものなり」

というのは、現実には天国が今その人のものであるということと、やがてきたるべき歴史の終末においてその天国はその人のものであると、この二重の構造と内容を持っているわけです。その最終的な意味合いの事態に対しての天国人とはいかなる人たちであり、いかにして待ち望むかというようなわけになってきたわけであります。

### ● 聖霊の油を持って迎える

それで、聖書を開いてもらいましょうかね。マタイ伝25章1節から13節、十人の乙女のお話であります。

「このとき天国は燈火を執りて、新郎を迎えに出づる十人の処女に比うべし。」

2 その中の五人は愚にして五人は慧し。

「愚かにして」というと、なにか馬鹿者かと思うですね。そうではない。「愚か」というのは不信ということ。「慧し」というのは頭がいいということではない。これは本当の信仰を持っていること。もし質的な面でいうならば、「エピグノーシス」ということで、靈知を持っている者。

女性の大事なはその魂の質であります。言葉の正しいまた深い意味において、ただ偉人というのではないけれども、偉い人のお母さんは魂がいい。魂の質は新しい素質―天国人の素質という―この素質は新しく、いただいた素質である。どうぞ、そういう人になってください。

ところが、この五人はその素質の受けそこないの不信の方で、五人はその素質をいただいたのが、この賢しという。

3 愚なる者は燈火をとりて油を携えず、

灯火はとつているが油を持っていなかったので、その灯火はだんだん細々として消えてしまふ。

4 慧きものは油を器に入れて燈火をともに携えたり。5 新郎、遅かりしかば、

皆まどろみて寝ぬ。6 夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎えよ」と呼ばれる声す。

7 ここに処女みな起きてその燈火を整えたるに、8 愚なる者は慧きものに言



う「なんじらの油を分けあたえよ、我らの燈火きゆるなり」

灯火の消えるのは、観念信仰という。観念信仰は始めはちよつとよさそうだけれども、懐中電灯と同じで、明るいなと思っているうちにだんだんその光度がうすくなつて、こういう右肩下がりカーブで消えてしまう。油を持つているのは逆に右肩上がりのカーブになる。うろたえて、そういうように言いましたところが、

9 慧きもの答えて言う「恐らくは我らと汝らとに足るまじ、寧ろ売るものに

往きて己がために買え」10 彼ら買わんとて往きたる間に新郎きたりたれば、

備えおりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉ざれたり。11 その

後かの他の処女どもも来りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言い

しに、12 答えて「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。

ここでキリストの譬話が急に自分の言葉に変わってしまった。

13 されば目を覚しおれ、汝らはその日その時を知らざるなり。

「いつかは知らねど」です。もうお察しのごとく、「油」はもちろん聖霊のことです。ここでもって何をキリストは譬話にしているか。聖霊は尽きぬ油である。また、聖霊は尽きぬ真清水でもある。ヨハネ伝 4 章。また、消えざる灯火である。何と言つてもいい。ヨハネ第一書にも、

「この油は即ち御霊なり」

という言葉がちゃんと書いてある。聖霊を宿していない信仰は、油を持っていない灯火のようなものであつて、これはみな衰えていく。ところが、聖霊という尽きざる油を持つている、その灯火はいよいよ明々と燃えている。

どうぞ、私たちが天国を用意する、天国を待ち望むというなら、ただポヤツと待つてたつて、それはダメですよ。わがうちに本当に油を携えて、いつキリストが再臨されようとも、

「はい、待つていました」

という待ち方の実質は、わがうちに本当に油を持って、自分自身が即ち消えざるところの灯火となる。

「汝らは世の光なり」

と言うが、

「汝らは世の灯火なり」

であります。暗夜の灯火。暗夜の一灯というわけです。

自分自身が、私たち自身が本当に、難破しようとする人たちの灯火、灯台とならなければ。また、本当に神の国を待ち望むところの、新郎を迎えるところの、備えあるところの灯台。いついかなる時もござれと。いつでもよろしいという、未完成における完成の姿がこの油を持つてるところの乙女です。

そのように聖霊を宿すと、ことに女の方は、目の光がちがってくる。そういう明るい、本



当に人を温める愛の眼差しがこの聖霊——愛の霊であるところの聖霊の油——これを持って神を迎えるという、キリストを迎えるという在り方です。

### ●突き抜けた魂

ヨハネ伝15章は、この頃の訳では、「つながっている」なんて書いてあるが、「つながって」いたっていいけれども、「宿る」「とどまる」ということ。その中に宿っていること。

「わがうちに宿れよ」

と。聖霊を今度はわがうちに宿す。わが懐の中に、腹の中に聖霊を宿す。御霊のキリストの中に自分が宿る。どちらを言おうと、パウロはどっちの言い方も自由自在に使っていますが、そういう宿りの、懐に入っている在り方が極めて大事です。

「目を覚ましおれ」

というのは結局、聖霊を宿していれば、これが眠っていても、目が覚めているような人です。私たちが眠るといえるのは、キリストの中に自分を托するんですから、そうすると、眠っているうちに聖霊の油がしらないまに貯えられてしまう。起き上がるというと、力を得て起き上がるわけです。

睡眠時間が少ないときは、よく祈りなさいよ。そうすると、他の時間を補うことができず、祈りの世界で。寝る前に、それから朝、まだ今日は眠いなんて思ったら、床の上に端座して祈る。そうすると、その眠気がすつ飛んで行ってしまう。これは具体的に皆さん、やらなければダメですよ、本当に。

そういうことで、「目を覚ましおれ」とは即ち、聖霊の油を持っていれば、灯っていれば、聖霊の灯火となつて光を発していれば、これが目が覚めていることです。やせ我慢して目を覚ましたって、それは眠くなるよ。いや、眠っていても、実に目が覚めているような人です。深く聖霊を宿して眠っていれば、その人の身边に微光がさしている。ドロボーがきても驚いて逃げて行ってしまう、なんてなことになっていくわけです。そういう状態にひとつなりたいもんだなと、私は思いますね。

法然さんなんていうのはそういう坊さんだった。あれはよく行脚あんぎゃした人です。ある所で宿を借りようとして戸を叩いたところが、

「お前みたいな乞食坊主は入れるわけにいかない」

と婆さんが戸を閉めてしまった。にこにこして、

「ああそうですか、どうも縁がありませんですね」

なんてね。そこでその庭先に寝てしまった。さすがに婆さんはちよつと気が咎めたものだから、そつと雨戸を開けて見たら、そこに光が射していた。これはとんでもない坊さんだと。そこで謝ったという話がある。

蓮月尼の歌に、



「宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ぶし」

という歌がある。宿を貸してくれないから、桜の木の下で寝た。そうしたら、おぼろ月夜で月影がさしてきて、なんとこの桜は素晴らしいなといって、かえって拒まれたことが、自分は桜の木の下で月影に照らされて眠ることになった。かえって自分を拒んだ人の方に向かって合掌して感謝したという。

そういう境地はもう本当に突き抜けた魂であります。私たちはそういう相対的善悪を突き抜けて、本当の絶対的な慈悲の世界、愛の世界に魂が入ったら、これは本当の勝利です。人がどう言ったこう言ったなんてことをまだ問題にしているうちは、魂はダメですね。

どうぞ、そういう灯火の人。本当にそれはもの凄い光として電光のごとくに輝くこともあれば、また「ほの暗き灯火を消すことなし」という話のごとく、本当にやわからかに光ることもあります。けれども消えない。

そういうことが、「目を覚ましてしている」こと。眠るも覚めるも目が覚めている。剣道の達人は、眠っていても、敵がくれば、足音が聞こえなくても、パツと目が覚めてしまう。これは物理的な音を聞いているのではない。もうひとつ別な音が聞こえるわけだ、魂の中に。

とにかく、自分は何も工夫はいらん。問題はそのような、主の御霊を、キリストの御霊を本当に宿すこと。その他にいずこに信仰なんてものがあるか。信仰なんて言っただけでガンバルからおかしなことになる。この御霊を受けとっている事態だけが本当の信である。

内村鑑三先生がああ『一日一生』の5月31日のところに書いているのを読んどらん。私は内村先生の書いた文字のうちで一番好きなところのひとつであります。先生もあの時は聖霊の人として書いたのでしょうか。もう信仰は何か思っていることではない。本当に自分が無とされて、無となつて、キリストと一つになっているその境地だという。内村先生もこんなことを言っていたかと思つて、私もちょっと驚いたようなしまつてした。全く私が言っていることと同じことを言つてらっしゃったからね。それだけのことを仰るなら、先生はなぜもつと御霊のことを公然ともつと積極的に仰らなかつたかと、そこは残念ですけれどもね。

●自分を投げ捨てて進んで行く

今度はルカ伝14章。

「<sup>15</sup>同席の者の一人これらの事を聞いてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』<sup>16</sup>之に言いたもう『或人、<sup>あ</sup>盛んなる夕餐<sup>ゆうげ</sup>を設けて、多くの人を招く。<sup>17</sup>夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備<sup>そな</sup>りたり」と言わしめたるに、<sup>18</sup>皆ひとしく辞<sup>ことわ</sup>りはじむ。初の者<sup>はじめ</sup>いう「われ田地を買えり、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」<sup>19</sup>他の者いう「われ五くびきの牛を買えり、之を駈<sup>た</sup>めすために往くなり。請う、許されんことを」



ことを」<sup>20</sup>また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往くこと能わず」<sup>21</sup>僕かえりて此等の事をその主人に告ぐ、家主いかりて僕に言う「とく町の大路と小路とに往きて、貧しき者・不具者・盲人・跛者などを此処に連れきたれ」<sup>22</sup>僕いう「主よ、仰のごとく為したれど、なお余の席あり」<sup>23</sup>主人、僕に言う「道や籬の辺にゆき、人々を強いて連れきたり、我が家に充たしめよ。」<sup>24</sup>われ汝らに告ぐ、かの招きおきたる者のうち一人だに、我が夕餐を味い得る者なし」(ルカ14・15〜24)

ああまた、キリストの言葉は激しい。まず、頑ななユダヤ人に対してキリストはこのよ  
うな譬話をやる。

集会をしていて、それは全くよんどころなくて来れない人は、それは何をか言わんです。  
けれども、なにか理由付けて、

「今日はせつかく行くこうと思いましたが、来客がありましたして行けません」

なんて電話かけてくるのがあるんだよ。私は電話で怒鳴つてやろうかと思うんだけど、  
まあまあと思って、怒鳴りませんけれども。来客を連れてきたらいい。連れて来れなかつ  
たら、

「私は日曜の午前はタブーで仕方ありません。私は絶対に行くところがあるので、

せつかくでございませう」

と言って、五分でも三分でもそこできたく会話をして帰します。

とにかく、饗宴の招待を断る。いろんなこの世の第二義、第三義的な事態をもつて断る。

「まず、神の国とその義を求めよ。その他のことはやがて与えられるぞ」

と。神の国とその義を求めること。即ち、神の国とそのキリスト。結局、「神の国と義」と  
いうことは一つのことになってしまうけれども。

神の国のその本体キリスト、これを求めて、日曜日を守る。私たちが日曜日の集会をい  
わゆる教会のようにマンネリズム的に、形式的にやっているなら、私はそんなことを言  
いませんよ。けれども、一回一回が真剣勝負で、前進の過程である。先へ進んで行く。来な  
いという、それだけ留まっているのでなくて後退してしまう。なんののかんと言って来  
なくなる人はたいていダメになってしまう。見ているとわかる。見なくたってわかる。聞  
かなくたってわかる。

行き詰まっている時こそ、いよいよ勇んで出てこなくては。それは人間小池にぶつかる  
のではない。この破れ衣を通して発するところの何ものか、キリストの事態にぶつかって、  
その現実を突破していくんですから。プロテスタントとは、いつも己自身にプロテストし  
て進んで行くのがプロテスタントで、これが本当の「エバンゲリウム」です。本当の「福音」、  
福の音信です。喜びの人とならんためには、くすぶっている自分を投げ捨てて進んで行く。  
その気合がこの集会というもの。集会に来る人たちはみなその気合で臨んでくる。それは



悲しみの顔してこようが、苦しい顔してこようが、何だつていいです。

とにかく、ここでもつて自分は一いつ、この相対界を相対界にしながら絶対界として、そこに相対界を本当に乗り越え、これを絶対的な質に変えていくような――天国ですよ、絶対界というのはい―この天国に変えていくところの人となりましょうと。即ち、自分の中にその天国的なものがくれば、そこが天国になるんだから。そこがどんなに暗くても明るくなるんだから。どんなに冷たくても、自分自身がストーブだから、暖かくなるんだから。私がいづか信州で集会してたら、

「先生の足下から火がたつていた」

と言う。そういうことが時々見えることがある。だから、皆さんが坐っている中に炎が立っている。

昨日のナポレオンの言葉のもう少しあとの方に、

「福音は霊的な火である」

というような言葉も発している。ナポレオンというやつはやつぱり行き詰まって、とうとうセント・ヘレナでもの凄いい告白をしたなど。あの一言のゆえに私はナポレオンというやつがその意味においては好きなんだ。

キリストをいただきましたら、あなた方のような乙女が、なにもジャンヌ・ダルクの真似する必要はないけれども、静かであつてジャンヌ・ダルクにも劣らないところの本当の神の力、光を持つんですよ。こんな素晴らしい宝を、この土の器にこの宝を盛って、

「この神の力の現れのために」

とパウロがコリント後書4章のところで言っているでしょうが。

私たちの集会は天国集会だから、この天国集会を断つたら、地獄に行ってしまうよ。人生には大事な瞬間がある。その瞬間を捕まえるためには、一切を投げ捨てて進んで行く。そうすれば、捨てたと思つたものが今度は逆にみんなそいつを救いあげてしまうようになる。

### ● 極限的な状況の放蕩息子

だから、「俺たちは選民で、どうのこうの」なんて言っているやつらが、せっかく招かれて、なんののかのとみんなこの世的な、第二義的な、自分のいわゆる幸福に関するようなことに囚われてやっているというのと、一番大事なものをとりそこなう。

「もう、よし。そこらの盲人や跛者や聾者や病人や何でもいいから連れてこい」という。

「我は病める者を救わんとてやつて来た」

と。心身ともに病める者を。「私は跛者ではありません」なんていうわけにはいかん。私も跛者です。私は霊的な跛者、霊的な盲人、霊的な癩病人である。私は何と言われたつて、



はいと言う。とにかく、私たちは極限的な状況の人間である。放蕩息子である。実はそういうもので、

「あなたがいなくては、私は生きてられません」  
ということ。

「あなたがいなくても、私は生きられます」

という人は、もうなにもこの福音の世界に來なくていい。だいたい、そういう人が多いんだよね。そういう人が多いんだけど、実はなにかにぶつかると、どっこい自分が行き詰まる。実は行き詰まっている本質を持っているものであることに気がついていないだけのはなしで、壁にぶつかると、本当は行き詰まっている人だということがわかったら、そうしたら、四方八方壁だったらどうしたらいいか。忍者のように天井を突き破って出掛けてこなくては。

天井を突き破るといえば、屋根をぶっ壊して、病人を吊り下ろして、キリストに助けを求めた話があるでしょ。あれが本当に天国を求めている姿です。八方塞がりだが、天井は開いている。絶対空間があいている。この絶対空間の世界に自分を引き上げてくださる方がある。絶対に行き詰まりがないんです。

「<sup>せ</sup>為んかた尽くれども決して望みは失わない。望みは上からくるから」

とパウロが言った。だから、もう行き詰まりをしらない人に、絶望を知らない人になります。自分の運命を人と比較してみると、

「どうもだいたい神さまは不公平のようだ」

なんて、何を言っているか。そういうように見えるところに神さまは驚くべき恵みを与えようとして待っておられる。どんなこの世の幸福も、この幸福に、この

「幸福なるかな」

に代えることができるか。運命や環境や、自分の生れつきの素質だとか才能だとか、そんなものを人と比べて、どうのこうのなんて言うことはよしませうや。一人びとりは神さまに絶対的に顧みられている。

### ●聖霊の火を投ぜんために来た

それと反対に今度は、生れつきなにか恵まれていたような人が妙なエリート意識になる。とんでもない。東大の学生が頭がいいなんていって、とんでもないです、そんなのは。小河内学長も卒業生に、

「お前たちはエリート意識を持つな」

と言ったじゃないですか。人間の側の、優れているの優れていないのと、そういうことではない。福音の与える、聖霊の与える、この神の霊・キリストの霊が与える世界は、一人びとりを最高の――他のものと比較することのできない絶対というのがある。絶対的な絶



対というやつ——その絶対的絶対という世界に一人びとりの質を入れてしまう。

「そうだつ！」と思いませんか。本当にそうですよ。もう楽なもんですよね。私は大言壮語するのでも何でもありません。御霊の事態をいい加減にしているような神学者や牧師さんが何人こようと、なんともないです、そんなものは。

どうぞ、皆さんは、パウロさんヨハネさんペテロさんは、みな皆さんの友だちですよ。

「あれはえらい人だな、とうてい及ばない」

なんて、そうじゃないですよ。器の大小は神さまがつくった。小さいながら、芥子種からしのごとき原始力を持っている。あなた方一人びとりの中にキリストというこの原始力が入っている。御霊という原始力が入っている。

「この火燃えたらんには何をか要せん」

とキリストが言われた。

「私は火を投ぜんために来たんだ。聖霊の火が燃えたら、何をか要せん」

と。そうでしょ。その「何をか要せん」というものを受けとることをしないで、他のいい加減な要するものを一生懸命で要するとしてやっているもんだから、断ってきたのはみんなダメだ。この世界に飛び込んでこないから。

それでまだ足りないものだから、

「籬まがきの外から、いいからみんな無理やりに引っぱってこい」

と。強い言葉です、キリストの。

「われ求めざりし者に求められ」

なんて、イザヤ書のどこかに書いてある。福音なんて思いもよらなかったところが、神さまが強引に引っぱり込んだら、とんでない素晴らしい世界だったと。

### ●自分を欠けたる者と自覚する者

とにかく、神さまの方ではその本願の効力をもつてする。いや実に、パウロみたいに福音に逆らっているやつを、

「あれは熱心だが、とんでもない熱心だから、あの自己義認の熱心を逆にキリスト

義認の熱心に変えてやろう」

というのが、復活のキリストがパウロを引っくり返したゆえんです。いわゆる自分の側の熱心なんてものはヘタすると危ない。地獄行きになる。

「ああ、あの人は信仰があつくて、聖書はよく研究して、ギリシア語やヘブライ語を勉強して」

なんていうような女性はかえってダメですよ、そんなのは。

みずからを誇るのサタンの角度です。ユダは優れたエリートエリートの弟子なんです。みんなが一目置いていた弟子だったに相違ない。こいつにサタンが入るわけです。こういうエリー



トのやつに。そして、「俺はひとつ」なんてなことになる。サタンがそうです。

「俺はひとつ神のごとくなろう」

と。神のごとく自分でなろうというやつがサタンですから。

「神さまの御意をどうぞ」

というのがキリストの角度です。キリストはもの凄い霊的な人物だが、しかし、その霊を私しない。どこまでも神の霊である。自分は何ものでもないという。

「自分は霊的に何々になりました」

なんて思いあがったらとんでもない。それはサタンです。よく、聖霊の事態に少しあれて、

「どうも霊的にまだ進みません」

なんて、霊的ということは何かそんなことに考えてはいけませんよ。これは「霊的」という言葉が躓きになる。それは「御霊にある」ことの他に「霊的」というような言葉をみだりに使っては本当はいかんです。

そういうようにして、神の国に入るところの終末的天国人というものは、自分を盲人とし、自分を跛者とし、自分を聾者として、自分を欠けたる者として本当に自覚している者。そして、

「あなたがなければ、これはどうにもなりません。もうキリストはわが絶対必要者なり」

と。その他のことはあつてもなくてもいい。

「イエスだけは、キリストだけはわが絶対」

という、そういう人がこの終末的天国人の資格なき資格なんです。

それと、その人たちは、あなたがなくてはしようがないということから、結局、先程の十人の乙女の五人の乙女のごとくに、御霊をいただくことになっていくわけです、そういう気持が。

これが天国待望の人たちの天人というもの。この世のえらそうなもの、この世の利口なもの、この世のいわゆる能力者なんていうものはみな天国の門の所で、

「ちよつと待てー！」

と言われる。

### ●「神—キリスト—我」の直結の世界

キリストが、

「一番お前たちはダメだ」

と言われたのがマタイ伝23章。

「<sup>13</sup>禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、なんじらは人の前に天国を閉して自ら入らず、入らんとする人の入るをも許さぬなり。」(マタイ23・13)

「とんでもないやつらだ」と。さっきのところでも、約束したところの人たちが、せつかく



約束したのに断ってしまって、みんな入ってこない。そういう、

「約束した人たちは一人も天国に來ない」

と書いてある。ユダヤ人はみんなダメだと。

「選民 エリートの人だなんて思っているやつはみんなダメだよ」

と、キリストの言葉は。実際そうですね、ユダヤ教徒は。あいかわらずキリストをメシヤとしない。

「ユダヤ教徒のうちの最大のチャンピオンはパウロだ。このパリサイ人中のパリサイ人パウロがああもの凄い180度の転回をして、キリストの僕となり、福音の土台を築いた。いかなる世界の思想に対してもこのキリスト教の——神学と言わなくとも——このようなもの凄い有機体的構造を持つているあのパウロ書簡というもの。お前たちのパリサイの最大のチャンピオンがこのようにキリストに完全に降参して、このようになつたじゃないか」

と言つていいわけです。キリストはもう既に予言しておられる。

「お前たちはみんなダメだ、みんな落第だ。一人も天国に入ってくる者がない」

と。約束の民ですよ、彼らは。この契約の民が実は契約を自ら破ってしまった。アブラハムにあれだけ約束されているのに、アブラハムの民は実は霊的なアブラハムの民しかなくなつてしまつて、血筋のユダヤ人はみんなダメである。

神の民は、お父さんが信仰があつたからといって、どっこい息子はそうはいかん。みんなこれは切れております。

「神—キリスト—我」

というものは全部、直結の世界です。

「義人の義はその人に歸し、悪人の悪はその人に歸する」

とエゼキエルが言つたけれども。義人の義、信仰における義はただこれを受けとる人にだけけるのであつて、血統的に継がれるものではない。

でありますので、パウロさんが全くアウトサイダーになり、例外者となつた。使徒たちがみなそうです。もちろん、ユダヤ人の中だつてクリスチャンになつた人はいくらでもありますけれども。大体、今はイスラエルでユダヤ教をやっているのはあいかわらず律法の民だよ。パウロが言つている「律法の義」に対してはあいかわらず実践している。パウロがさんざん言っている新約聖書を読んで、なぜ、

「俺たちは間違つていたかな」

と思わないのかね。

それがこのキリストがここで言つているところのパリサイ人なんです。

「<sup>15</sup>禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得ん

ために海陸を経めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。」



16 禍害なるかな、盲目なる手引よ、なんじらは言う云々」(マタイ 23・15、16) といつて、自分たちが実は本当に霊盲でありながら、霊盲でないようなつもりで導くから逆にみんなを谷底へ落つこととしてしまうようなことになる。

「誓うな。然り、然り、否、否と言え」

と。御旨に従って行くことなんです。「然り、然り、否、否と言え」ということは。自分のなにか主観的判断で、「然り、然り。否、否」ではないですよ。御旨に対して

「然り、然り」

と言え。自分に対しては

「否、否」

と言う。こういうことなんです。自己本位のことに対しては「否」であり、神中心のことがらに対しては「然り」である。

そういう者はみんな天国の門の所で、

「待て！ お前たちは入れるつもりだが、どっこいそうはいかん」

と。ミルトンが『パラダイス・ロスト』の中でそんなところを描いているところがある。そしてスーツとどこかへすつ飛ばされる。

### ● 砂漠はサフランの如く

さきほど言った、跛者とか何とかいうような表現で言われている事態がやはりイザヤ書の中に書いてある。前に私は『砂漠はサフランの如く』(曠愛新書第3号、1965年刊)のところにイザヤ書35章を訳した。

「曠野とかわける地とは楽しめよ！

砂漠は歡びてサフランの如く花咲け！

2 花咲き匂いて歡べよ、

且つ歡喜び且つ謳歌え！

レバノンの栄光は彼女に与えられ、

カルメルとシヤロンの壮美も彼女にあらん。

彼らこそは実存主の栄光を觀、

我らの神の壮美を觀ん。

3 汝ら萎えたる手を強くし、

わななく膝を健やかにせよ。

4 心たじろぐ者どもに言え、

「汝ら雄々しかれ、おそるるなかれ！

觀よ、汝らの神を！ 復讐は来れり。

神の復讐なり！ 彼は来れり、汝らを救う。」



5 その時しも、盲者の目はひらけ、  
聾者の耳はあくべし。

6 その時しも、跛者は鹿の如くに跳び走り、  
啞者の舌は歡び歌わん。

然り曠野には泉水たばしり、  
砂漠には川流るべし。

7 焼けたる砂地は池となり、  
涸れ地は水の源となり、

野犬の伏したる巢窟は  
蘆葦の境域とならん。

8 かくて彼処に大路あり、「聖き路」ととなえらるべし。  
穢れたるはこれを過ぐる能わず、

これはただ彼の民のものなり。  
この路を往く者は、愚者なりとも迷うことなし。

9 彼処に獅子居らず、  
猛き獣もこの路を踏まず、

凡そ此の如きは其処に見あたらす、  
ただ贖われたる者のみぞ其処を往く。

10 実存主に贖い救われし者、帰り来らん。  
彼らは歡び謳いてシオンに到り、

その首には永遠の歡喜あらん。  
歡樂と歡喜とを彼らは勝ち得、

悲哀と悲嘆とは逃げ去るべし。」(イザヤ 35・1〜10 私訳)

この終末的天国をイザヤが歌っています。この終末的天国を現に、現実にきたらせたものがキリストであった。だから、キリストは正直、跛者を立たせた。盲者の目をあけた。聾者の耳をあけた。イザヤが預言していることは既にキリストはこれを現実にした。終末的現在とした。

### ●究極的な終末を予表している徴

この終末的現在が、歴史の究極的な終末の世界を予表しているところの徴であるんです。福音書の現実。だから、皆さんは福音書を読んで、この歴史の終末の驚くべき救いの世界のその約束が空手形ではない。事実をもつてキリストが証している。キリストの言葉と業は全部、徴ですよ。イエス・キリストが徴なんですから。イエス・キリストの他に徴はない。奇蹟なんていうけれども、キリストこそが本当の奇蹟なんです。イエス・キリスト



を本当に受けとった者は、世の中に奇蹟なんてものはありはしない。

それは自分自身が奇蹟なんだから。自分自身がこの驚くべきことである。あなた方は自分の事態に本当に、キリストを受けとって驚かなくてはいかん。

「私はどうしてこんなことになったでしょうか」

と。驚きは同時に喜びなんです。この大歓喜の音信を、

「この大歓喜を福音せよ」

という言葉なんですよ、ギリシア語を直接に訳すと。ギリシア語というのはテンス（時称）が非常に細かくできている。アラミ語、ヘブライ語というのはもつとテンスが簡単です。完了か未完了なんです。未完了がただいゆる時間的な未完了もあるけれども、現在時を未完了的な言い方でいくらでも言う。これから起こることに対してそれが断定的な内容でも、未完了的な言い方をすれば、しかし、それをテンスの未完了に訳してはダメなんです。ギリシア語の聖書を原典なんていうけれども、こいつは原典の資料となっているアラミ語の世界の気合を受け損なっていると、ある意味において言っていると思う。だから、私はそこをところをひとつ大胆な訳し方をしようと思う。

「何とかであろう」

なんて言われると、気が抜けてしまうよな。

「である。そうなるぞ」

と訳す。「なるであろう」ではない。

「祈りたることは既に得られたりとせよ」

という、キリストの気合がどうしてそのようなことになってしまったかと。

私みたいなやつがどうしてこういうことになったかと、自分で不思議でしようがない。キチガイでも何でもありませんよ。

「先生は少し気がちがったか」

なんて、そうじゃない。そりゃ気がちがったよ、別な気になったから。これは天気になってしまった。天の気が入ってきたから、今までのとはちがってしまった。そういう気がちがいであります。

もう人の気持がよく読めてしまう。こちらが何もわだかまりがなくなるとね。まだまだ私なんかダメです。もつともつと私は深くなりたい。私とはかくすべてのことがこれからだと思っている。還暦なんてものはすつ飛ばしてしまったから、今63歳だけでも、3歳の童子だ(笑)。あなた方よりか若いんだから、どうぞ、いろいろ教えてください。人生はこれからである。

### ●「二デナリ」は永遠の生命の糧

マタイ伝20章に行きます。ちよつと妙なところですが。



「1 天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし。なんて、キリストの仰る言い方はおもしろいですね。

「天国は主人のごとし」

なんて論理は合わないんだけどね。

2 一日、一デナリの約束をなして、労働人どもを葡萄園に遣す。3 また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、4 「なんじらも葡萄園に往け、相当のものを与えん」といえば、彼らも往く。5 十二時頃と三時頃に復いでて前のごとくす。6 五時頃また出でしに、

もうだいたい夕方にかかい。

なお立つ者等のあるを見ていう「何ゆえ終日ここに空しく立つか」

お前たち、もつたいないはなしだと。

7 かれら言う「たれも我らを雇わぬ故なり」主人いう「なんじらも葡萄園に往け」8 夕になりて葡萄園の主人その家司に言う「労働人を呼びて、後の者より始め先の者にまで賃銀をはらえ」

「後の者より始め」なんて、おもしろいことが書いてある。

9 斯て五時ごろに雇われしもの来りて、おのおの一デナリを受く。10 先の者きたりて、多く受くるならんと思いに、之も亦おのおの一デナリを受く。11 受けしとき、家主にむかい呟きて言う、12 「この後の者どもは僅に一時間はたらきたるに、汝は一日の労と暑さとを忍びたる我らと均しく、之を遇えり」

ひどい待遇をしたが、これは不当ではないかと。まあすぐ労働問題が起きるような、全くそのようなわけです。今はもうこの賃金問題、みんなこれです。

13 主人こたえて其の一人に言う「友よ、我なんじに不正をなさず、汝は我と一デナリの約束をせしにあらざるや。14 己が物を取りて往け、この後の者に汝とひとしく与うるは、我が意なり。15 わが物を我が意のままに為るは可からずや、我よきが故に汝の目あしきか」16 斯のごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし」(マタイ 20・1〜16)

みんな躓くです、この譬話は。それはこの世の論理からいえば躓きますよ。不公平です。何ですか、この「一デナリ」とは。「一デナリ」は一日の労銀である。

あのナルドの香油は「300デナリ」というんだから、300日の生活費に値するような貴い香油を全部ぶちまけたという。しかも、壺をぶち破って全的に、300デナリの高価な香油をキリストに注いだ。片一方の寡婦は自分の持つていたたったレプタ二つを全部、お賽銭に投げてしまった。そういう全的な在り方をキリストは無条件に飲びたもうわけです。

私たちは何をしていても、それが本当に神に仕えているか。これが全的な在り方です。何をしても、本当の根底の意味では神奉仕である。全てのわがが同時に神讚美である。



仕事は讚美である。みんな仕事はなにか生活費のためだなんて思っているけれども、仕事は本当に神讚美である。どう取り扱われようといい。

もうそうやってきたら、そういう角度でもし、雇用者たちが本当にやっていたら、今度は雇っている人が

「お前たちは本当によく働く不思議なやつだ。よし、ボーナスを10倍にしてやろう」なんてなわけで、そういうようなことになるわけです。人生は本当にそういうった気合でいなくてはね。人間というものはそういうものであるということを、なぜ妙に物質化してしまったり、機械化してしまっただか。機械も物質も自由自在に使える主体としていつも自覚しなくてはいいかん。

みんな「一デナリ」。計算すれば合わない、不公平だと。一日の糧。そこに一時間働こうが、十時間働こうが、一時間にこもるまことと十時間にこもるまこと、それをこの質において計っているんです。「一デナリ」というやつは。時間で計っているのではない。

「その一時間をお前たちはよく働いた。その十時間をお前たちはよく働いた。それは質的に同じ質でなければダメだぞ」

と。同質的な働き方をしている。同質的な働きとして認めるものは、また「一デナリ」をもって象徴されているわけです。「一デナリ」において表しているところのものはみな同質である。

「この一デナリは即ち、永遠の生命であるぞ」

と。キリストがここに譬話をしているこの「一デナリ」は一日一生としてかかっていることとの「永遠の生命」の糧なんです。永遠の生命には、みな同じである。

### ● 賜りたる信

法然と親鸞との対話のところで、

「信心はもともと如来から賜ったものである」

と。信心のこのころというものは如来から賜ったものであって、お前の信仰とか何とかいうものではないぞという。

「もつとご上人しやうにんの信仰のように私はなりたい」

なんて思うわけだね。先生のような信仰になりたいなんて思っはけませんよ、皆さん。これは賜りたる信であって、

「わしの信心も、善信ぜんしん（親鸞）の信心も同じことだよ」と。等しいと。

「如来から来た、仏から来たところの、回向えきうされたところの信であって、我らの造作ではない。等しく如来より賜りたる信であるがゆえに」

と。「みなこれ等しい」とこう言った。さすがに法然さんです。



キリストの信が皆さんの中に入ってきた。御霊と同時にキリストの信が入ってきた。これ同じです。みな、あなた方も私も同じはなしです。

「どうも私はまだ信仰が足りませんが、もう少し信仰があつくなりましょう」

なんてよく教会の人が言うが、そんなことがあるか。信仰を何ものかなんて思っているからいかん。

今度の第6号(曠愛新書第6号「キリスト道」、1967年刊)にも私は書いたでしょ。

「私は信仰、信なんてものではありません。もしあるならば、こういうものですよ」と書いた。皆さん、時々読んでくださいね、私のを。

「ああ、先生の言うことは決まっています」

なんて。決まっていない。数学の世界は、「 $2+2=4$ 」と決まっている。けれども、生命の真理というものは、今日聞く言葉と明日聞く言葉とが同じ言葉であっても、内容がみなががつている、響きがちがつている。ちがつているということは、現象面ではちがつているが、本体は一つです。そういうものを常に新たに受けとっていくわけです。私は、そういうことで、本当に自分自身が皆さんと集会をしながら、前進せしめられている始末であります。

そのように、この賜りたる「一デナリ」はみな等しく「永遠の生命」である。なに勘定しているか、計算しているか。相対的計算の世界はキリストは与えない。キリストが与えるものはみな絶対性のものでありますから。それは躓きますよ、普通は。

そのようなことになりましたらば、もう一切の事態に対して、

「貧しきにも富めるにも、困るときも困らざるるときも、順風るときも逆風のと  
きも、われ一切の秘訣を得たり」

とパウロが言ったでしょ。

「なにも持たぬごとくして全てのものを持ち、悲しめる者のごとくあるけれど

も実は飲んでいる。云々」

と、コリント後書6章に書いてある。

### ●終末的な天国を待ち望む実存的待望の姿

私たちが天国を、終末的な天国を待ち望む実存的待望の姿というものが、どういうものであるかということ、このようなキリストのいろいろな譬話で——まだまだいくらでもあつてきりがないけれども——特に著しいものは、そういうものをもつて見ていく。最後にもうひとつ言いたい。マタイ伝25章。牧者が羊と山羊とを分けて、

「31人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位

に坐せん。32斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと

牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33羊をその右に、山羊をその左におかん。

34爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて



世の創はじめより汝等のために備えられたる国を嗣つげ。

天国をつけと、神の国をつけと。

35 なんじら我が飢えしときに食くらわせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36 裸なりしときに衣きせ、病みしときに訪たずひ、獄ひとやに在りしときに来きたりたればなり」37 爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時いつなんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲ませし。38 何時いつなんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。39 何時いつなんじの病み、また獄ひとやに在りしを見て、汝にいたりし」40 王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟あななる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為なしたるなり。」(マタイ25・31〜40)

善悪を超越してまつて、

「これがいい、これがわるい」

なんていうような範疇はんちゆうからもうひとつ突き抜けた、絶対善の世界は、無意識的自然の世界です。分析して自分を省みている世界は第一義の世界ではない。無意識的世界というのは主客未分の世界である。主観、客観の別れないとろの、主客未分あるいは主客一如の世界。そういう主客一如の世界、そういうような魂。世の中にそういう人が時々あります。なにも信心なんて言わなくても、

「まあなんとこの人は不思議なひとだろう」

と。もう善悪を考えなくても、善ならざるをえないような好人物。そういうのがいるね。人にいいことをすることがもう自然なんです、非常に。そして、自分で「すみませんでした」なんてやっている。そういうような人。

「右の手のすることを左の手に知らせるな」

とキリストが言ったのはこの世界です。もう自然である。それは自分の姿がもうすっかり、とつぷりと光の世界にひたつていて光をも意識しないような光の世界になってしまう。

●あるがまま投げ出せ

それをシラーの美学論の方の言葉でいうと、「遊びの衝動」です。人間は遊んでいる時に最も人間であるという。

子どもが遊んでいる姿は、もう全的なんだ。子どもは本当に分裂なく遊ぶ。だから、

「幼児あなまの「い」とん」

とキリストが言うのは、

「全的であれよ」

とこういうことです。

「幼児あなまの如くならずば天国に入れない」



とは、「全的であれよ」ということ。「全的であれよ」ということは、なにも精神統一しなくたっていい。全的であるということが「あるがまま」ということです。

「あるがまま投げ出せ」

ということ。「あるがまま」がただそれでいいと言っているのではない。あるがままの己を投げださなければダメです。それを投げなければ何もならん。「あるがままがいい」というと、「私は何もしくないのかな」

なんて。そんなのは怠け者になってしまう。ヒルティが、

「一番いけないのは怠け者だ」

と言っている。あるがままの己があるがままに分裂しないで投身するところが、この「全的」なんです。それが本当に「遊び」。「遊ぶ」というのはただ遊戯をするということではない。全的に投じて本当に遊びの姿であることが、この「遊び」ということ。だから、私は学生に、「学ぶも遊ぶも一つである。学遊一如となれ」と言う。学遊一如という姿、とにかく分裂のない姿。善きことをしてても、

「いつそんなことをしましたか」

「いや、困っている人に、喉が渴いている人に水一杯やったのが、それが実は私にしたんだよ。神さまにしたんだよ」

と。この愛の実存。極まるところはこの愛の実存であります。何とも説明できません、この愛という言葉は。

### ●日は日曜日

人助け、人に生命を与え、喜びを与え、悲しみを変えて喜びにするという、とにかくそのようなことを自然に発動していくためには、さつきから申し上げている、この聖霊の灯火、油を持っていなくては。この油があれば、これは愛の油ですから。この油があれば、その行為が自然に泉のごとくに湧いてくる。なにも何かを求めていることではない。

「いや、あなたはヨブを義人と仰るけれども、実は求むるところがあつて、あれはやっているんですよ」

なんて、サタンのやつが言う。神さまは、

「それならやってみろ」

と言う。ヨブをきんぎん苦しめたところが、ヨブは

「エホバ与え、エホバ取りたもう。エホバの聖名は讃むべきかな」

と。サタンは参ってしまった。なかなか参らないサタンはまた悪いことをしますけれども。

「エホバは与え、エホバは取りたもう。エホバの聖名は讃むべきかな。取るも与えるもみな神さまのことである」

ということ。



完全にキリスト一切、神一切というような角度から——「一切」というと、なにか他のことをしないように思うけれども、そうじゃない——何をしていてもそこに一切がかかっているわけです。そういうようなことになってきましたらば、もう何といたしますかね、

「日は好日」

という言葉がるけれども、日は日曜日。日月火水木金土でなくて、日曜日日曜日という。私は一週間が楽しくてしょうがない。毎日日曜ですからね」

「安息日にも常に主たるなり」

とキリストが言われたが、安息日でない普通の日もみな主たるなりで、これ全部、安息日にしてしまう。人を安らいにもたらす日なんだ、安息日というのは。自分がキリストの中に安らえば力がくるから、今度は人に本当に安息を与える。

まあなんと楽しい世界だろうか。しかも、かたつ苦しい道徳よりもはるかに素晴らしい絶対の実存の世界であります。これが妙法の世界です。靈法は即ち妙法。

「わが法の柳の系の乱れ髪」

と。見たところ乱れ髪のようにだが、

「解くにとかれず結つにゆわれぬ」

が、この言うに言われず説くに説かれざるところの妙法の世界に私たちの在り方が質的になっていく。全部なるなんていいません。質的にはそういうようになってきますから何かしらんが楽になってきましたと。それで、「あつこれは」と思った時にすぐそこに自分の魂のスイッチが切り替わる。磁石が北を指すように磁性を帯びているから北を指してしまう。

### ● 十字架を負うところの力

さっきの大饗宴の譬話のあとの方に、

「己自身をも捨てて、おのが十字架を負って、我に従わざる者はこの天国には入れぬ」

というような意味のことが書いてある。私たちはこの悪の世において、自分自身に対してこの闇の世に対して、なんらかの意味において、福音の天国人は十字架を負わされる。しかも、それは苦しくない。なんとすれば、十字架を負うところの力がきているから。ナポレオンも降参したところの力がきているから。私たちはナポレオンよりも勇者ですよ。その力がきているから十字架が負えるわけです。

そして、これが天国への、天国人の徴である。

「聖名のため傷痕を持たずしてこの神の国に入ることができるか」

というような歌がある。聖名のため福音のためなら、お前たちはいろいろな人に悪口を言われたり迫害されたりする。しかし、飲べよと。ペテロがペテロ前書4章で、



「<sup>12</sup>愛する者よ、汝らを試みんとて<sup>きた</sup>来る火のごとき試練を異なる事として怪しまず、<sup>13</sup>反つてキリストの苦難に<sup>あずか</sup>与れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び樂しまん為なり。<sup>14</sup>もし汝等キリストの名のために<sup>そし</sup>謗られなば幸福なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」(ペテロ前4・12〜14)

と。であるから、パウロもヨハネもペテロもヤコブもみんな盛んなる勝利の喜びをもつて進んで行った。まず始末のわるい人になる。どうにも彼らをやっつけようとしてもやっつけるわけにいかん不思議なやつらだなと。相対的に喧嘩はしない。みんなもうどん底から担ってしまっているから。もうひとつ上の世界に出たてしまっているから。そして、どうぞこの世界にお入りくださいと。そういうような意味において、

「今のときのしばしの<sup>くるしみ</sup>苦難は来らんとする<sup>きた</sup>栄光に比ぶるに足らず」と、パウロがローマ書8章で言った。

「栄光より栄光に至りてついにキリストの姿に化するなり」

と言った。黙示録7章の終りの方は私も大好きなところのひとつですけれども、

「<sup>12</sup>『アアメン、讚美・栄光・智慧・感謝・尊貴・<sup>ちから</sup>能力・<sup>いきおい</sup>勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン』<sup>13</sup>長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を着たるは如何なる者にして何処より来りしか』<sup>14</sup>我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる<sup>なやみ</sup>患難より出できたり、<sup>こひつじ</sup>羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。』

はい、ヨハネがはつきり言っています。私たちの実存は羔の十字架の血によってすっかり贖われて、無色透明にされて、天衣無縫にされました。

<sup>15</sup>この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。<sup>16</sup>彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを<sup>おか</sup>侵すことなし。<sup>17</sup>御座の前にいます<sup>こひつじ</sup>羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を<sup>ぬぐ</sup>拭い給うべければなり」(黙示録7・12〜17)

藤井先生の詩の中に、

「ああ秋の野の野草に宿る白露のごとく  
誰かその眼の底に涙のない人があるか」

という非常に好きな歌があります。けれども、その涙をとおして本当の歓喜の世界に入れられる。全く福音は喜びの音信そのものであります。これをおいて、いずこに何を求めるか。私たちはこの喜びそのものの証人とならなくてはいかに。居ても立つてもいられない気持ちであります。おしまい。

